

【共同研究】

家族関係単純図式投影法の基礎的研究V

— 高校生とその両親の現実の家族図式の比較 —

山田 裕紀子^{*1}・草田 寿子^{*2}

A Study of Figures of Family Relationships V : Comparisons of the Real Family Figures among Family Members of Families with High School Students

Yukiko Yamada, Hisako Kusada

The purpose of this study was (1) to compare the real family figures among family members (fathers, mothers and high school students), and (2) to investigate the relationships between the distances among family members on the real family figures and the family communication based on the data of parents. The subjects were 93 high school students and their parents. They were administered the following tests; the figures of family relationships which was one of the forms of Schematic Projective Techniques (SPT), and the self-reported family communication scale. When the distances among each family member were near on the real family figure of high school students, the real family figures of parents were similar to the figures of their children. Therefore, the results suggest that fathers, mothers and their children in high school similarly recognize the family relationships. The Correlational analysis revealed the scores of positive family communication had the significant negative correlations with the distances of father-mother and father-child. These results suggest that the relationships of marital and father-child affect the cognition of family relationships.

Key words : Schematic Projective Techniques; Figures of Family Relationships; distances among family members; patterns of family relationships; high school students; parents.

目 的

水島・草田・大平・岡本・柴田・鈴木・田

*1 やまだ ゆきこ

*2 くさだ ひさこ 文教大学人間科学部

口(1991)と草田(1996, 投稿中)は、中学生、高校生、大学生を対象として、水島(1978)が考案した図式的投影法の一つである家族関係単純図式投影法を実施し、図式化させた現実と理想の家族関係についてパターン分析を行っている。その結果、現実の家族

図式においては、中学生、高校生の双方ともに4つのパターンが、大学生で7つのパターンが見いだされている。また、理想の家族図式においては、中学生で3つのパターンが、大学生で5つのパターンが見いだされている。これらの各パターンは被験者の認知している家族関係を如実に表し、被験者の心理的現実と対応していることが明らかにされている。これら一連の研究において、本投影法を用いることによって、被験者の認知している家族関係を把握することが可能であり、本法が家族関係査定法として有効であることが示されている。しかし、これまでの家族図式に関する研究では、調査対象者が青年期の子どものみであり、両親を含めた3者の家族図式についての比較検討は行われていない。そこで本研究では、高校生とその両親を対象とし、高校生とその両親の現実の家族図式の比較を行うことによって、3者の家族関係に対する認知の違いについて検討を行う。今回は、高校生の4つの現実の家族図式パターンに基づいて、各パターンの両親の家族図式の特徴を明らかにしたい。

また、家族図式における各成員間（父母、父子、母子間）の心理的距離に対する、両親と子どもの認知の一致度を検討することにより、子どもと両親の家族関係に対する認知について具体的な検討を行う。

さらに、草田・山田（投稿中）において、高校生の現実の家族図式と家族コミュニケーションの関連を検討した結果、現実の家族図式の4つのパターンにより、家族コミュニケーションの良好さにおいて差が見られることが見いだされている。特に、父親、母親、子どもの3者の距離が密接した図式を作成した高校生は、家族コミュニケーションを肯定的にとらえていることが明らかにされている。また、父母の距離が離れていると認知している高校生ほど、家族コミュニケーションを否定的にとらえていることが明らかとなっている。これらの高校生の結果をふまえ、本研究では、両親の家族図式における各成員間の距

離と家族コミュニケーションとの間に高校生の場合と同様な関連が見られるかについて検討を行う。

方 法

調査対象者

高校生（1～3年生）とその両親を含む、120家族に調査を依頼した。まず授業内に高校生に質問紙（子ども用、父親用、母親用の3部）を配布し、自宅で質問紙に回答するように説明した。なお、質問紙に回答する際、家族（高校生と両親）が互いに相談して回答することがないように注意した。回収方法は、調査者に直接手渡すか、郵送のどちらかであった。回答が得られたのは93家族で、回収率は、77.5%であった。その内訳については、男子生徒51名、女子生徒41名、性別不明1名と父親93名、母親93名であった。子どもの平均年齢は16.5歳（15～18歳）、父親の平均年齢は46.7歳（37歳～57歳）、母親の平均年齢は43.9歳（37歳～56歳）であった。家族構成人数は平均5.1人（3人～7人）であった。なお以上の調査対象者は草田・山田（投稿中）の調査対象者と同一である。

質問紙構成

質問紙は、対象者の基本的属性、及び家族構成について問うフェイスシート、(1)家族コミュニケーション尺度、(2)家族関係単純図式投影法で構成されていた。

(1)家族コミュニケーション尺度

草田・山田（投稿中）において検討された家族コミュニケーション尺度（18項目）を使用した。本尺度は、「肯定的コミュニケーション（8項目）」と「否定的コミュニケーション（10項目）」の2つの下位尺度で構成されている。肯定的、否定的コミュニケーション尺度はそれぞれ、得点が高いほど肯定的または否定的であることを示している。また尺度全体の得点は、得点が高いほど家族コミュニケーションが肯定的であることを示している。回答形式は、「とてもよく当てはまる」から「まったく当てはまらない」までの5段

階評定にした。

なお、クロンバックの α 係数による信頼性は、肯定的コミュニケーションで.77, 否定的コミュニケーションで.83, 尺度全体では.86と草田・山田(投稿中)において確認されている。

(2)家族関係単純図式投影法

家族成員を表す円型コマ(1円玉大)と直径12cmの円が記入されたB5判の台紙を使用した。質問紙には、円を家族とみなし、現実の家族関係(心理的關係)をコマを使って表し、図式作成後、コマの位置、家族成員名、図式に対する説明(自由記述)を記述するという内容の教示を明記しておいた。

結果と考察

高校生と父母の現実の家族関係パターンの比較

高校生93名のうち、家族図式を完全に作成したものは55名であった。そこで、家族図式の分析は55組の高校生とその両親を対象に行うこととした。

草田・山田(投稿中)は、高校生の現実の家族図式パターンが、I型からIV型までの4つの類型に分かれることを見出している。I型(36人)は、父、母、子の各家族成員が密接しているのが特徴であり、II型(8人)は、父母の間に子どもが置かれたために、父母の

距離が若干離れているもののI型と同様に家族成員がまとまっている図式である。III型(9人)は、父母の距離が近く、親子の距離が離れているという特徴があり、IV型(2人)は、父母の距離が極端に離れ、子どもがどちらかの親に近く、全体としてまとまりに欠ける図式である。

このI型からIV型に属した高校生の両親の現実の家族図式が、それぞれの類型においてどのような特徴があるかを検討するために、高校生の家族図式の類型に基づき、両親の現実の家族図式における父母、父子、母子、親子(父子と母子の距離の和を2で割ったもの)の距離の平均と標準偏差を算出した(Table 1)。また、各類型の高校生とその両親の現実の家族図式の典型例をFig. 1に示した。

まず、I型の父親と母親それぞれの家族図式は、高校生の図式と同様に、父母、父子、母子、親子の各距離がともに近いことが示された。両親の家族図式に対する自由記述を分析すると、「家族の和がある」「気持ちの上での距離感はない」「よく話し合うので、気持ちは通じている」「家族のコミュニケーションを大切にしている」など、親密で、コミュニケーションの良好さを表明しているものが多かった。II型の両親の図式においては、

Table 1. 高校生の現実の家族図式パターンに対応する両親の家族図式の距離の平均とSD

類型(人数)	父親				母親			
	父母	父子	母子	親子	父母	父子	母子	親子
I型(36人)	23.37 (10.83)	25.91 (9.27)	23.77 (6.17)	24.84 (5.49)	22.09 (6.40)	26.54 (7.78)	24.31 (5.84)	25.43 (5.07)
II型(8人)	20.75 (1.75)	30.25 (11.35)	25.13 (6.64)	27.69 (4.47)	20.63 (.92)	23.75 (6.34)	21.75 (4.95)	22.75 (3.67)
III型(9人)	26.78 (10.26)	36.33 (11.76)	31.78 (10.53)	34.06 (8.82)	24.89 (8.94)	32.56 (8.69)	27.22 (8.20)	29.89 (6.46)
IV型(2人)	42.00 (28.28)	40.00 (26.87)	26.00 (8.49)	33.00 (9.19)	77.50 (19.09)	82.00 (18.38)	53.00 (29.70)	67.50 (24.04)

()内はSD 単位: mm

家族関係単純図式投影法の基礎的研究V：高校生とその両親の現実の家族図式の比較

	高 校 生	父 親	母 親
I 型	<p>(説明なし)</p>	<p>長男は、独立したと思っているので、円外にした。</p>	<p>長男は大学在学中で下宿生活をしているので、少し距離をおいた。日頃お互いによく話し合い、気持ちは通じているつもりなので、円内にした。</p>
II 型	<p>見てのとおりである。</p>	<p>娘2人とは、父よりも母の方と距離が近い(よく話す)</p>	<p>現在、長男、長女とは別居中だが、気持ちの上では皆近いので。</p>
III 型	<p>兄は市内で一人暮らしをしているため、多少意志の疎通が計りづらいところもあるが、休日はちょくちょく遊びに行くので、さほどの距離を感じない。</p>	<p>長男は別居しているので円の外にあるが、休日は時々帰省して冗談口などするので、距離はない感じ。次男は妻との会話が気軽にでき、私との距離を感じる。</p>	<p>長男は別居生活のため円の外だが、暇なとき帰って来て常に面白い話などするので距離を感じない。また、次男と私のコマがくっついているのは、夫より私の方によく相談し、心が近く感ずるから。</p>
IV 型	<p>父は自分勝手な人であらゆる面で私から離れている。一番近いのは妹で、母は私の良き理解者であり、祖母は大切に思わなくてはならないと思う人です。</p>	<p>(説明なし)</p>	<p>(説明なし)</p>

Fig. 1 高校生とその両親の現実の家族図式パターンの典型例と自由記述

Table 2. 高校生と両親の家族図式の距離の相関

	父				母			
	父母	父子	母子	親子	父母	父子	母子	親子
高 父母	.13				.49***			
校 父子		.45***				.59***		
生 母子			.32**				.14	
親子				.56***				.42***

** $p < .01$ *** $p < .001$

まず、母親の図式では、I型の両親の家族図式と同様に3者間の距離が近いものであったが、父親の図式においては、母子の距離が父子の距離よりも若干近いという特徴があった。III型の両親の図式では、両親共に父母の距離が近く、父子、母子、親子の距離は父母の距離よりも離れており、子どもである高校生の作った図式と類似するものであった。なお、II型とIII型の両親の家族図式に対する説明をみると、I型とほぼ同様の内容であった。IV型では、まず父親の図式において、父母の距離がI、II型と比べて離れている傾向にあった ($F(3, 50)=2.40, p < .10$)。一方、母親の図式では、父母、父子、母子の距離が他の型よりも大きく離れており、分散分析の結果、父母、父子、母子の各距離いずれにおいても有意差が認められた (父母: $F(3, 50)=41.24, p < .001$; 父子: $F(3, 50)=31.29, p < .001$; 母子: $F(3, 50)=10.31, p < .001$)。他の類型と同様に、IV型においても両親の作成した現実の家族図式、特に母親の図式が、高校生の家族図式と類似したものであることが示された。

以上、Fig. 1の典型例をみても明らかなように、I、II、III型において、父、母、子の3者の作成した家族図式はほぼ類似した形態を示しており、高校生と両親が認知している現実の家族関係は比較的一致する傾向にあることが示された。

親子間における各成員間の心理的距離に対する認知の一致度

高校生と父親、及び高校生と母親各2者間において、父母、父子、母子、親子の各成員間の心理的距離に対する認知が、どの程度一致しているかを検討するために、相関分析を

行った (Table 2)。

まず、父親と子どもの間では、父子、母子の各距離において.30以上の有意な高い正の相関がみられ、従って、親子の関係については、高校生と父親の認知が一致する傾向にあることが示された。しかし、父母の距離については有意な相関がみられず ($r=.13, n.s.$)、父母の関係については、高校生と父親の間で認知のズレがみられた。

母親と子どもの間では、父母、父子の距離で.40以上の有意な高い正の相関がみられ、高校生と母親が父母、父子の関係を同じように認知していることが示された。また、母子の距離については、有意な相関がみられず ($r=.14, n.s.$)、母親と子どもの中で、母子関係の認知にズレがみられた。

双方の親子間で認知の一致がみられたのは、父子の距離のみであった。高校生とその父親は自分たちの関係を同じようにとらえ、また母親も父子関係に対して子どもとほぼ同様の認知を示していると思われる。

父母間における各成員間の心理的距離に対する認知の一致度

両親の各成員間の心理的距離に対する認知の一致度を検討するために相関分析を行った (Table 3)。父子、母子、親子の距離には有意な相関が見られなかったが、父母の距離には有意な高い正の相関が見られた ($r=.46, p < .01$)。この結果から、夫婦が互いに自分たちの関係に対して同様に認知していることが示された。相関を平面にプロットしたところ、特に父母の距離が近い側で関連が強いことがみてとれた。従って、夫(父親)が夫婦の心理的距離が近いと認知している場合、その妻

(母親)も同様の傾向を示すことが明らかになった。

Table 3. 両親間における家族図式の距離の相関

	父親			
	父母	父子	母子	親子
父母	.46**			
父子		.18		
母子			.12	
親子				.15

**p<.01

両親の家族図式と家族コミュニケーションとの関連

両親の家族図式の各成員間の距離と家族コミュニケーションとの関連を検討するために、父親、母親それぞれにおいて、図式の各成員間の距離と家族コミュニケーション尺度との間で相関分析を行った (Table 4)。その結果、まず、父親では、父母の距離と肯定的コミュニケーション尺度得点の間のみ、有意な相関がみられた ($r=-.26, p<.05$)。このことは、父親が、父母の距離が近いと認知しているほど、家族のコミュニケーションを肯定的にとらえていることを示している。一方、母親においては、父母の距離に関しては、肯定的コミュニケーション、否定的コミュニケーション、尺度全体のいずれにおいても有意な相関がみられた。従って、父親と同様、母親においても、父母(夫婦)の心理的距離が近いと認知しているほど、家族コミュニケーションが良好であるとうけとめる傾向にあることが支持された。

草田・山田(投稿中)は、高校生において、家族図式の各距離と家族コミュニケーション尺度との間で、同様の相関分析を行っている。その結果、高校生は父母の距離が離れていると認知しているほど、家族のコミュニケーションを否定的にとらえる傾向のあることが示唆されている。これらの研究結果から、高校生ばかりでなく、父親と母親の両者においても、家族のコミュニケーションが肯定的であるか、否定的であるかという評価は、両親(夫婦)の関係と深く関係していることが示された。

また、母親においては、父母の距離の他に父子の距離と家族コミュニケーションとの間に有意な相関がみられた。このことから、母親の場合、夫婦関係と同時に父子関係も、家族コミュニケーションの評価に影響を与える重要な関係と捉えていることが示唆された。

全体的考察

本研究においては、高校生とその両親を対象として、子どもと両親の家族図式を比較すること、また両親の家族図式上の心理的距離と家族コミュニケーションとの関連を検討することを主な目的とした。

まず、高校生と両親の現実の家族図式を検討した結果、3者の作成した家族図式は比較的類似したものであり、父親、母親、子どもの3者は、現実の家族関係に対してある程度一致した認知を示していることが確認された。この傾向は、I型のような家族成員が近接している家族図式を作成した高校生とその両親(全体の65%以上)に強く見られた。家族成

Table 4. 両親における家族図式の距離と家族コミュニケーション尺度との相関

	父親				母親			
	父母	父子	母子	親子	父母	父子	母子	親子
肯定的	-.26*	-.14	-.05	-.13	-.29**	-.27*	-.11	-.23*
否定的	.12	.03	-.16	-.07	.36**	.35**	.14	.30**
全体	-.20	-.11	-.08	-.03	-.39***	-.37**	-.14	-.32**

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

人間の家族に対する認知のズレが少ないことは、その家族が健康である可能性が高いことを示しているように思われる。実際、I型の高校生とその両親の家族図式に対する説明を分析しても、家族関係が比較的親密で、家族に問題のない健康な家族であることがうかがえる。亀口(1997)と中野・亀口(1992)は、臨床的な問題を抱えている家族の特徴として、家族関係に対する家族成員間の認知にズレのあることを指摘し、この認知のズレが家族の健康性の指標になると示唆している。本研究において、現実の家族関係に対する子どもと両親の認知のズレが少なかったのは、健康な家族を調査の対象としたことが大きな要因かもしれない。もっとも高校生とその両親の3者とも調査に協力し、家族図式を作成してくれたこと自体が、家族関係が良好であり、家族に問題のない健康な家族であることを物語っているのかもしれない。いずれにしても今後、臨床群の高校生とその両親に家族図式を実施し、家族に対する認知のズレが健康群と比較してどのような特徴があるかを検討する必要があるだろう。

また一方、両親が作成した家族図式を、高校生(子ども)の家族図式がどれだけ実際の家族関係を投影しているかを検討するための客観的指標として位置づけるならば、高校生と両親の家族図式に対応がみられたという結果は、次のことを示しているように思われる。すなわち、高校生の作成した家族図式が単に彼らが認知している主観的な現実の家族関係を反映していることを示すだけでなく、高校生が、比較的、客観的に実際の家族関係を認知していることを示すものと思われる。

次に、両親の家族図式上の各成員間の距離と、家族コミュニケーションの関連を検討した結果、高校生の結果(草田・山田、投稿中)と同様、両親においても家族図式上の父母、父子の心理的距離と家族コミュニケーションとが強く関連していることが見いだされた。この結果は、高校生とその両親の3者とも、父母(夫婦)と父子の心理的距離に近いほど、

家族のコミュニケーションがうまく機能していると認知していることを示している。草田(1995)は、家族の健康性と家族図式における父母、父子の距離との関連が強く、健康な家族は父母と父子の心理的距離が近いことを指摘している。家族コミュニケーションが、家族の健康性を規定する重要な要因の一つであることは多くの家族研究者が支持しているが、これらの結果を考え合わせると、本研究においても、草田(1995)や茂木(1996)が指摘しているように、家族の健康性は、父母(夫婦)関係や父子関係のあり方に強く影響を受けていると考えられる。

以上、家族関係単純図式投影法は、家族に対する認知を査定するのに有効であり、家族成員間の認知のズレ(特に心理的距離に対するズレ)を視覚的にわかりやすく捉えることができる測定道具の一つであることがある程度確認された。今後は、臨床群を含めた多様な対象者に家族図式を実施し、両親と子どもの家族に対する認知のズレを家族の健康性の視点からさらに検討したい。

引用文献

- 亀口憲治：1997，家族の問題，人文書院
- 草田寿子：1995，家族関係単純図式投影法の基礎的研究，一家族関係査定法としての可能性一，カウンセリング研究，28，21-27.
- 草田寿子：1996，家族関係単純図式投影法の基礎的研究，一家族図式に表現された中学生の家族関係パターン一，カウンセリング研究，29，208-216.
- 草田寿子・山田裕紀子(投稿中)，家族関係単純図式投影法の基礎的研究IV，一家族図式に表現された高校生の家族関係パターンと家族コミュニケーションとの関連一
- 水島恵一：1978，実証的かつ実感的な体験研究の方法とテーマ，文教大学紀要，12，1-11.
- 水島恵一・草田寿子・大平英樹・岡本かおり・柴田詠子・鈴木さとみ・田口博子：1991，パーソナルコンピューターを用いた図式的投影法による家族関係認知の評定と心理療法への応用，家族心理学研究，5，79-88.

家族関係単純図式投影法の基礎的研究Ⅴ：高校生とその両親の現実の家族図式の比較

茂木千明：1996，家族関係単純図式投影法による健康な家族関係，「予備的研究」，仙台白百合女子大学紀要創刊号，135-143.

中野まり・亀口憲治：1992，思春期の子どもとそ

の両親の家族イメージ，「臨床群と非臨床群の比較を通して」，福岡教育大学紀要，41，283-290.